

# アンソールの《愛の園》：カーニバル、演劇、ユートピア

鈴木俊晴

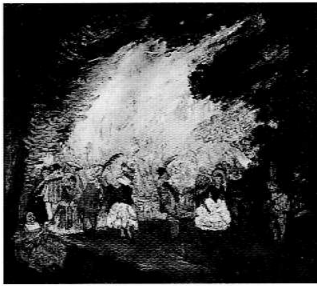


図1 ジェームズ・アンソール  
《愛の園》  
1888年 豊田市美術館蔵



図2 ブルターニュの画家  
《愛の園》  
15世紀 個人蔵



図3 ペーテル・パウル・ルーベンス  
《愛の園》  
1632-35年頃 プラド美術館蔵、マドリッド



図4 ヴァシリー・カンディンスキー  
《インプロヴィゼーション27 (愛の園II)》  
1912年 メトロポリタン美術館蔵、ニューヨーク

## はじめに

カーニバルと、避暑観光客向けの海水浴場で知られるオステンドの、それぞれ観光客向けの土産物屋に生まれたジェームズ・アンソール (James Ensor: 1860年、オステンド - 1949年、オステンド) は、その店内におかれた雑多な商品のなかでもとりわけ仮面を好んで描き、「仮面の画家」として19世紀末から20世紀初頭の象徴主義を、そして、その激しい色彩と大胆なデフォルマシオンのためにフォーヴィスムをそれぞれ予告するに留まらず、真の意味で独自の、強烈な絵画世界を構築した画家として知られている。

本論は1888年のアンソールの作品《愛の園》(豊田市美術館蔵；図1)について多角的に検証することを狙いとし、今後の研究の見取り図として位置づけられるものである。はじめに、アンソールにおける「愛の園」の主題を検討し、それらの差異を指摘する。次に、典拠の問題を扱い、従来より指摘されているアントワーヌ・ヴァトーをさらに16-17世紀の北方絵画まで遡りうることを示す。そこから、アンソールによるいくつかの《愛の園》のなかでも特に1888年の作例においてカーニバル的な要素がみられ、同時にそれが特異な演劇性を備えており、そこにアナキーな理想郷とも言うべきものが立ち現れていることを指摘する。晩年のテキストが示すように、アンソールにとって「愛の園」とはまさにカーニバルのうちに含まれるものなのだから<sup>1</sup>。

## 1. アンソールの《愛の園》

はじめに「愛の園」という主題を振り返っておこう。「愛の園」の図像的な源泉は中世にまで遡ることができる。たとえば、15世紀のブルターニュ。愛の園の画家と呼ばれた作家の作品(図2)をのぞいてみれば、そこでは、騎士と貴婦人からなる複数のカップルが密に寄り添い、愛の儀式とも言うべきものを取り結んでいる<sup>2</sup>。ここで明らかになるのは、愛の園における儀礼的なものの重要さであり、それは数世紀後のルーベンスの作例(図3)においても引き続き認められる<sup>3</sup>。

しかしながら、20世紀初頭にカンディンスキーが描いた《インプロヴィゼーション27 (愛の園II)》(図4)をみてみれば、男女間の性愛こそがユートピアへの至近な鍵として描かれていることがわかる<sup>4</sup>。これは前世紀に限った話ではない。聖母を示す「閉じた庭」の主題から派生したとも言われる「愛の園」に定型と呼べる表現はなく、「黄金時代」などの類型ともなる(図5)。たとえば北方の画家ルーカス・クラナハが描く裸体の男女や、ルーベンスが描いた、まるで一体となり混ざり合うことにこそ快楽を見出しているかのような農民の踊り(図6)までもその系譜となろう。このようなユートピア的な表象はたとえばマティスなどにも見られるものであり、アンソールの活躍した19世紀末から20世紀にかけてもある程度共有されていたものといえる。

このように「愛の園」とは、歴史的にみると、男女のときに宮廷愛的な礼儀作法に支配された理想世界であり、一方で性愛さえも示唆するアナーキスム的な世界として表出するものであった。

本稿が対象とする1888年の作例をはじめとして、アンソールはその画業のなかでいくつかの《愛の園》を描いている。それぞれの特徴に触れたのち、88年の《愛の園》に戻りたい。同年の男女が深い樹々に囲まれている銅版画(図7)では、シルクハットなどの特徴的な衣装からもわかるように「同時代」のブルジョワの交わりを描いている点に加え、特に中央に腰掛けた人物たちの視線や会話の交わりは、同じく当世風の衣装で社交の風景を描いたヴァトーに近いものがある。

1891年には大きく激しい筆致で乱舞する人々を描き出しており(図8)、画面の大半を覆う緑に対し、赤と黄が効果的に配されているために、その情景の激しさは増している。描かれた人物たちはそれぞれが思い思いに自由な動きを見せ、転倒しているものもいれば、あたかもスウィングするように踊りに興じるものもある。なかには明らかに仮装をしているものもあり、彼らが山なりの構図の中に配された狂騒的な光景は自然とカーニバルを思わせる。

一方で、世紀をまたいだ20世紀の作例(図9、10)では、他のアンソールの作品と同じように、《愛の園》もまた張りつめた緊張感を失い、狂騒というよりはむしろ夢幻的で穏やかな理想郷が前景化している。1910年の作品では、左右の高い樹木が大きなドームを形成し、そのなかにアルルカンやピエロ、もしくはメズタンなどのコンメディア・デッラルテに登場するような姿の群像が、まさに白昼夢的な光景のうちに配されている。さらに、1914年の作例では、同じく左右に樹木がそびえ、半円をつくっており、その根本にはそれぞれ10人近くの人々がくつろいでいる。半円の背景では男女が手を取り輪となって踊っており、田園での牧歌的な世界となっている。

そこで、当館所蔵の《愛の園》をみてみれば、やはりドーム型の構図をとっているうえに、各々の人物の服装や冠飾は1891年の表現主義的な《愛の園》に近いとはいえ、一見したところ狂騒とは無縁であり、中央で向かい合う二人には「愛の園」という主題の穏やかで儀礼的な側面を看取することができる。しかし、その中央の二人の顔の表現、つまり奇妙に浅黒い女性と、色白の皮膚に朱のさした、酔っぱらっているかのような男性の表情(図1部分1)、さらには、画面左の黒い帽子をかぶった人物の白い仮面、その隣の人物の奇妙な帽子、そして、右奥のキスを交わす二人とその手前の浅黒い顔色の男性、または左右に配された楽士たち(図1部分2)、彼らが展開する光景は夢幻的でありながらも、粗野で下品な印象を与える。これは1887年の《海辺のカーニバル》(図11)や20世紀にはいつてからの《出会い》(図12)などにも接近し、後景の水辺を思わせると同時に舞台の書割であるかのような情景も類似している。また一方では、舞台という点も含め、1889年(1908年に再度絵画化)の《仮面の劇場》(図13)、そして1906年ごろより温めていた人形舞踏の構想を絵画化した、アンソールの作品のなかでもとり



図5 ルーカス・クラナハ  
《黄金時代》  
1530年 国立美術館蔵、オスロ



図6 ルーベンス  
《農民の踊り》  
1636年頃 プラド美術館蔵、マドリッド

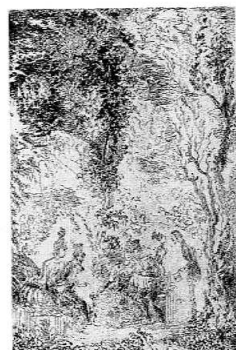


図7 アンソール  
《愛の園》  
1888年 個人蔵



図8 アンソール  
《愛の園》  
1891年 フォンダシオン・ソサンテック蔵、ベルン

